

薬事日報連載 第三回：「戦力外通知、トラになると決めた日」

株式会社 ChromaJean 代表取締役社長 三輪勝彦 2024.4.23

ハナシは、今から半年前に遡る。薬事日報様から連載の機会をいただいた。テーマを聞くと「対談企画の打ち上げで聞かせてもらった、数々のアレをお願いします」とのこと。

問題は、アレの定義だ。宴会の小噺ではないので安易な約束はしかねる。一体どれをお見舞い致しましょうか。深酒の席で雄弁に語った、華麗な愚行録のことだと察しはつく。

「今の実績に辿り着くまでの三輪さんならではのストーリーで、読者の心を揺さぶりたいんですよ。やっぱりアレですよ。是非、ドラマティックな内容をお願いします」。

了解だ。歴史ある新聞社に求められる“連載のアウトライン”が、これで決まった。

「クロマジーン社長、自身の黒歴史をドラマティックに語る」。

国立・宇部工業高等専門学校を卒業して以来、僕のキャリアが始まった。どこの大学も出ていないが、胸を張ってそう答えている。進路を意識し始めた頃から、憧れ続けた学び舎だったからだ。実際、他の公立高校は受験すらしていない。(当時、併願可能だった)

理由は簡単だ。「高専へ入学すれば、大層モテるらしい」。当時の僕にとって、これ以上の動機は必要なかった。要するに、“中二の妄想がクライマックス”なのである。

宇部高専に入学してから卒業するまで、特にキャリアプランについて考えてこなかった。当時、どれだけ何も考えていなかったか。自身の学生時代を振り返り、当時の興味・関心をレーダーチャートにしてみた。図1に示す。

僕が実際にモテたかどうかは伏せておく。学業面の特記事項なし。だが異性への執着だけは、観測目盛り越えを果たしている。こんな不逞の輩がいたら、背中をどやしつけたくなる。親の顔が見てみたいものだ(連載第1回参照)。

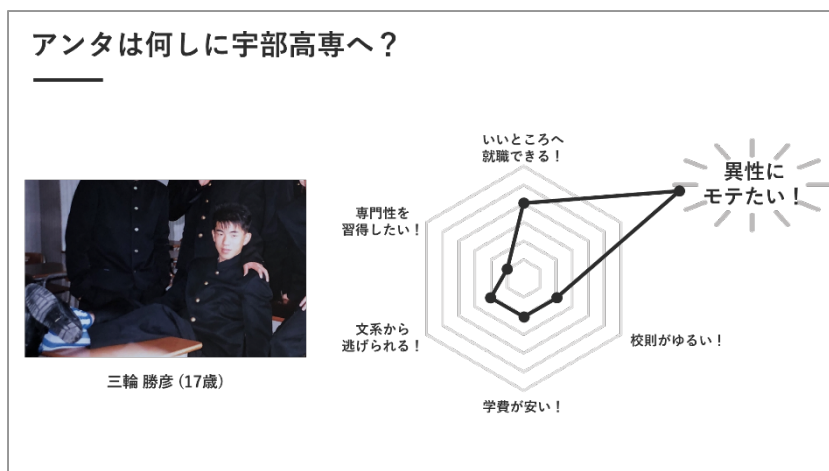


図1: 社長・三輪の学生時代の興味・関心を示したレーダーチャート

母校は、高専制度が定められた第一期校にあたる。偉大な先輩方が築いた信頼と実績のおかげで（むろん、試験は受けたが）製薬業界最大手の武田薬品に入社が叶った。

僕の黒歴史は、ここから始まる。当時は、“大企業に就職したら勝ち、そこで終わり”だと思っていた。このような“志”の低い者がうっかり社会に出ると、そりゃあ痛い目に遭う。

武田薬品は、世界有数のグローバル製薬企業のひとつとして知られる。同社では、国内最高水準の大学院を卒業したエリート達が研究活動に明け暮れる。ナレッジ、スキル、マインドの全てにおいて、チャラけた自分なんぞが到底ついて行けるレベルではなかった。

希望に満ちて入社したものの、かつてない敗北感を抱いた。そして早々に諦め、開きなおり、イヤなことから逃げ続けた。当時は、なかなかのスパルタの時代だ。僕のような不屈き者は、徹底的に追い詰められる。「こんなヤツいらん」と、公然と宣告されることもあった。

当時をモチベーショングラフにして振り返る。図2に示す。必然的なやる気の低下、焦燥感、所在のなさが表れている。最終的には、当時の職場から戦力外通知を受けた。

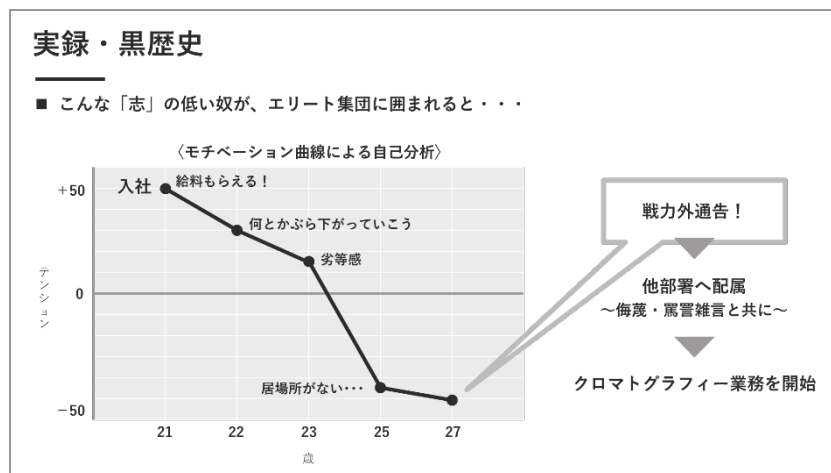


図2: チャラリーマン研究員・三輪（当時）のモチベーショングラフ

「キミは、一体何ならできるんだ？もうええわ、ずっと雑用やっつけ！」。侮蔑の目、吐き捨てるような言葉と共に、“クロマトグラフィー精製”専任の業務を命じられた。

この悔しさと恥ずかしさで、目が醒めた。自分が無価値なことは、随分前から自覚していた。こんな惨めな精神状態には決して戻るまい、と心に決めた。ゼッタイミカエシテヤル。

最初に手を着けたのは、“どこで勝負するか”を判断することだった。心を入れ替えて仕事に取り組むにせよ、すでに舗装された道で競争したところでエリート研究者達に敗北することは自明。それではこの先の気持ちが持たない。

意外に早く、仮説が立った。自分に命じられた“雑用”が未開の領域であることに気づいた。当時の“クロマトグラフィー精製”業務は、朝から晩まで文字通り、単純作業の繰り返し

だった。連載第1回で示した図を参照いただきたい。

欲しい成分が、【管】から出てくるのを待ち構え、その瞬間にガラス瓶で受けるのが任務だ。酔っ払いがお店で粗相するのを先回りして、気の利いた容器で大惨事を防ぐ所作にかなり近い。図3に示す。毎日、ひたすらこれを繰り返す。最初は、なにかの刑罰かと思っただけらしい。

しかし何か、心にひっかかるものがあった。国内トップの製薬企業ですらこんなに原始的作業を続けているのだから、これを便利にすれば“ヒトカドの人物”になれるかもしれない。不要と言われ続けた自分が、はじめて職場で必要とされる人間になれるかもしれない。単純で稚拙な発想だった。けれどその予感に、僕の未来が拓けたような気がした。

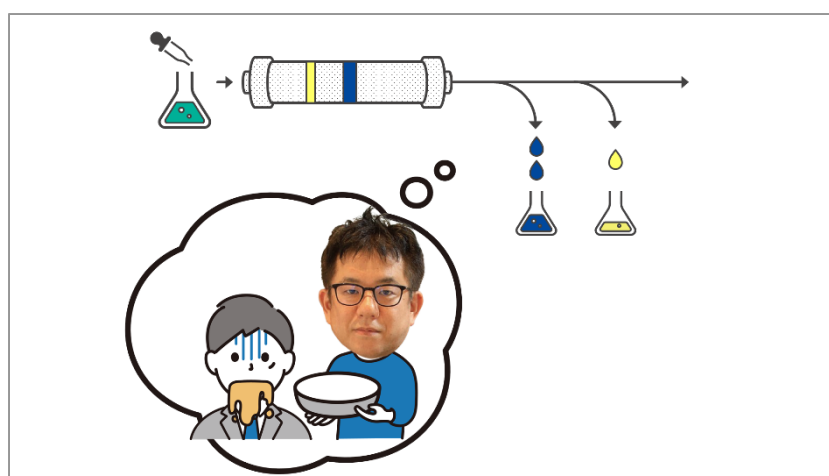


図3: 居酒屋で時々見かける若手の粗相に、クロマトグラフィーが重なった

自分を賭ける場所が見つかったところで、次の段階に移った。“ヒトカドの人物”になるために、習慣を身に着ける必要があった。知の“巨人の肩に乗る”のが手っ取り早い。自分自身で「わかる」→「できる」のサイクルを回してみることから始めた。

具体的には、インプット（論文を読み、理解すること）とアウトプット（実務で成果を上げること）を繰り返した。これによって、“クロマトグラフィー”の原理原則を理解し、使いこなせるレベルを目指した。約4年間、休まず続けた。図4に示す。

取り組み前後における、自身の変化を述べる。知識面では、論文のタイトルを見ただけで、おおよその内容が判別できるようになった。実務面では、化学構造とデータを見ただけで、問題の深さと打ち手が推測できるようになっていた。

当然ながら、ロールモデルはいなかった。全て独学だったが、特に辛いとは思わなかった。自らが選んだ道であり、何より向いていたように思う。化学物質のプロファイルを読み取り、事実を解析し、創造力を働かせて解決の糸口を見つける作業には、推理小説を読むような知的興奮があり、解けば達成感があった。そして、自分の技術を頼ってくれる支持者が徐々に

増えていったことに、自分の進む方向の手ごたえを掴んだ気がした。

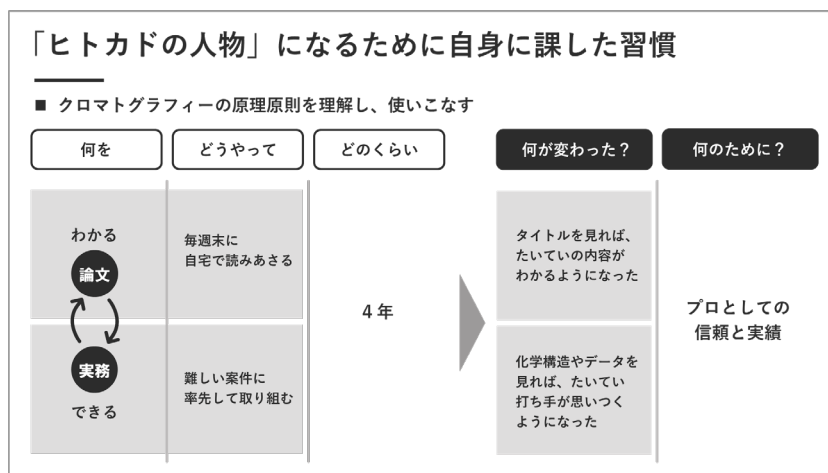


図 4: 当時、「ヒトカドの人物」を目指した習慣と、自身の変化

ここから、クロマトグラファー（クロマトの専門家）としてのキャリアがはじまった。マンガのタイガーマスクなら、ちょうど「虎だ！虎になるんだ！」と一念発起する場面に当たるところ。本家に匹敵する血の滲むような努力を厭わない、と自身に誓った。

あれから 20 年以上が経った。社会貢献活動も本家に倣うことにした。愛猫家の僕は、動物の孤児院への寄付を毎年続けている。彼らに幸あれと願いつつ、今日も持病の腰痛と闘う。

“ちゃおチュール”で引き寄せた猫を膝に乗せながら、“虎の穴”と呼ぶべき、自分に課した修行の場面をよく思い出す。少し変わった取り組みをした。このあたりは次回以降で述べる。



図 5: 氏名、三輪おこげ・ザ・ローレンス（ロシアンブルー）

いつも僕の膝の上を陣取り無表情で喉を鳴らすこのカオ、そういえばちょっとタイガーマスクに似ている。

【了】